

カンキツ苗木生産のための簡易な接ぎ木法「トップバッディング」の特性

カンキツ苗木生産のための接ぎ木法「トップバッディング」は、操作が容易で簡便である。接ぎ木未経験者でも熟練者と同等の苗木が生産でき、接ぎ木時間も大幅に短縮される。

農業研究センター果樹研究所常緑果樹研究室 (担当者: 北村光康)

研究のねらい

わが国のカンキツ苗木生産は、春期の切り接ぎ法と初秋期の芽接ぎ法で行われている。切り接ぎ法は高い熟練度を要するため、主な苗木産地では接ぎ木を専門とする職人によって行われてきたが高齢化と後継者不足により、カンキツ苗の育成が困難になりつつある。また、芽接ぎ法は地上部を残して接ぎ木するため、接木操作が煩わしいという欠点がある。

そこで、切り接ぎと芽接ぎの利点を活用した簡便で熟練を要さず、大量の苗木生産に適する接ぎ木法 (トップバッディング) を確立する。

研究の成果

1. トップバッディングは、春～初夏期に台木のカラタチ実生の樹液が流動し、樹皮が容易に剥げ芽接ぎできる時期に実施する春芽接ぎ法である (写真 1)。
2. 穂部は芽接ぎ法と同様の方法で作成し、台部は地上 20～50cm でせん除し、せん除部から垂直に切れ目を入れる。その切れ目両側に剥皮し、穂部を挿入した後、ラボラトリーフィルムで被覆する (写真 1)。
3. 活着率は、100%で切り接ぎ法と差はない。穂部の発芽が切り接ぎより遅れるため初期生育は劣るが、最終的な生育に大きな差はない。また、穂部の茎長にばらつきはみられるものの、切り接ぎ法よりばらつきは少ない (表 1、3)。
4. 接ぎ木操作に要する時間は、切り接ぎより明らかに短く、全操作時間で 42%短縮できる (表 2)。
5. 接ぎ木未経験者でも 100%活着し、熟練者と同等の苗木生産が可能である (表 3)。

普及上の留意点

1. カンキツ苗木の大量生産のための簡易な接ぎ木法として有望である。
2. 台木が展葉し樹液が十分に流動して、樹皮が容易に剥げるのを確認して作業を行う必要がある。
3. 台木の切り口付近から接ぎ木用テープが破損することがあるので、テープを薄く伸ばし過ぎないようにする。

表1 接ぎ木法の違いが穂部の生育に及ぼす影響

接ぎ木法	処理数	活着率	発芽までの 日数	幹径(mm)			茎長(cm)			葉数 (枚)
				5月11日	1月6日	肥大率	7/1	9/2	11/10	
TB50	3本	100%	23日	13.8	15.8	114%	13	41	66	31
TB20	3	100	30	13.6	14.9	110	6	45	57	30
切り接ぎ	3	100	9	15.2	16.7	110	22	62	69	30

※TB50:トップバッディング 台木長50cm、TB20:トップバッディング 台木長20cm。
幹径は地上部5cmを調査。

表2 接ぎ木法の違いが作業時間に及ぼす影響(10本当たり)

接ぎ木法	穂部作成 (分:秒)	接木操作 (分:秒)	合計 (分:秒)	切り接ぎを100 とした比率
トップバッディング	0:52	10:30	11:22	58%
切り接ぎ	5:02	14:30	19:32	100

注)接木操作は台木削り、穂部挿入、ラボラトリーフィルム被覆の合計時間。

表3 接ぎ木未経験者によるトップバッディングが活着率および生育に及ぼす影響

処理区	処理数	活着率	発芽までの 日数	処理6カ月後			
				茎長	±SD	葉数	
	本	%	日	cm		枚	
接ぎ木未経験者	A	5	100	32	51	8.3	31
	B	5	100	27	47	7.9	30
	C	5	100	33	44	9.4	31
	D	5	100	35	55	18.3	36
	E	5	100	34	40	6.4	27
未経験者平均	25	100	32	47	11.3	31	
経験者	10	100	35	40	20.1	25	

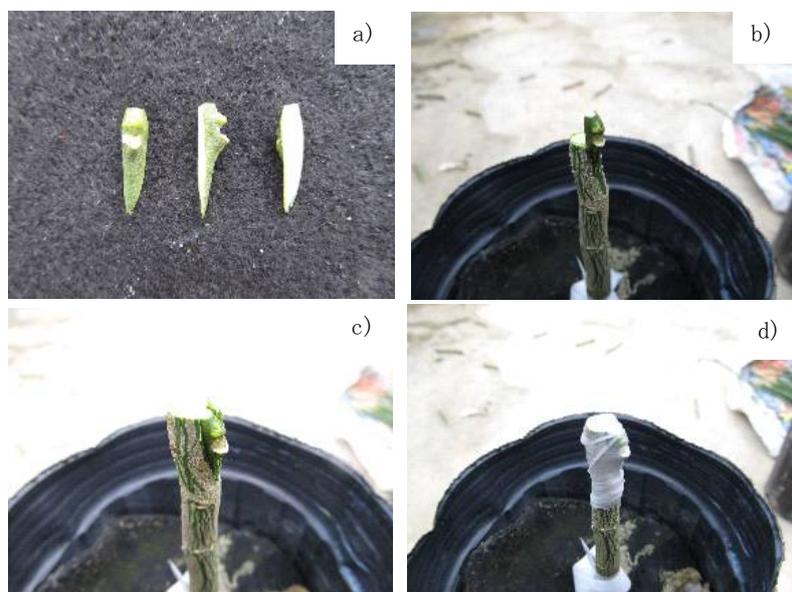


写真1 TBの操作方法

- a)穂部の作成、b)穂部の挿入①、
c)穂部の挿入②、d)ラボラトリーフィルムの被覆